

近代ドイツの大学における『学修の手引き』

－ケーニヒスベルク大学哲学部に注目して－

藤 井 基 貴

＜要 旨＞

本研究の目的は近代ドイツの大学において中世以来の「リベラル・アーツ」の伝統がどのように受け継がれ、また発展していたのかを明らかにすることにある。

そのための手がかりとして、1770年にプロイセン政府からケーニヒスベルク大学に対して出された『学修の手引き』に注目し、同大学哲学部に課せられた教育課程および教育内容の分析を行った。

考察の成果として、1) 哲学部の教育課程は『学修の手引き』によって改訂されたが、開講科目についての指示がすべて遵守されたわけではなかったこと、2) プロイセン政府は、国家の発展にとって有益な学問として政治、経済および芸術を奨励したこと、3) 『学修の手引き』と『講義要項』の異同を検証することは、政府と大学との間にある緊張関係を解明するための作業となること、が明らかとなった。

1. はじめに

近代ドイツの大学は神学部、法学部、医学部、哲学部の四学部からなり、神学部、法学部、医学部は上級学部、哲学部は下級学部と呼ばれていた。哲学部はもともと上級学部の予科である「文理の基礎学部(Facultatis artium)」に起源を持ち、中世から近代初期にかけてギムナジウムが発展したことで教養学部へと昇格し、近代において哲学部として定着する¹⁾。

哲学部は、中世以来の「自由七科」の伝統に基づき、ラテン語、論理学、修辞学の三学と算術、幾何、天文、音楽の四科に関わる講義科目を開講した。それらは上級学部において専門教育を受けるための必須準備課程とみ

なされており、いわゆる「リベラル・アーツ」を身につけるための教育課程であった。

大学史家ジャック・ヴェルジェ (Jacques Verger, 1943-) によれば、近代に至るまでの大学における三学四科の教育については「講義科目」および「教育方法」などについて、いまだに不明な点が多いとされる²⁾。また、近代ドイツにおいて哲学部は予科としての教育課程から教員養成のための学部へと昇格を果たしたのであるが、そこでは国家による積極的な大学教育への介入が行われた³⁾。こうして哲学部に新たな役割が与えられるなかで、カント (Immanuel Kant, 1724-1804) は『諸学部の争い』(1798年)を著し、「哲学的大学」の理念を提唱することで哲学部を大学の基礎として位置づけようとした。彼の構想はフィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)、シュライエルマッハー (Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)、シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854)、フンボルト (Wilhelm von Humboldt, 1767-1835) らの大学論へ受け継がれ、ベルリン大学の創設へと結実する。

したがって、哲学部において「リベラル・アーツ」がどのように教授され、またどのような学問的な発展を遂げていたのかを明らかにすることは、近代の大学教育の歴史を辿るというだけでなく、哲学部の役割の変容過程、さらには「ドイツ・モデル」に象徴される近代大学像の歴史的起源を検証する作業になると目される。

その一方で、近代ドイツの大学像に迫るための史・資料は二度の戦禍によって、その多くが失われ、また冷戦下にあって所在が不明になったものも少なくない。そのため1990年代後半になって、ようやくプロイセンの大学史に関する史・資料が文書館において整備され始め、近年ではこれらを活用した新たな研究成果が出され始めたところである⁴⁾。

本稿では、それらの研究成果に学びつつ、カントが在籍したケーニヒスベルク大学哲学部の教育課程および教育内容の具体像を明らかにする。そのための分析史料は、同大学が学生に告示した『講義要項』 (*Vorlesungsverzeichnisse der Universität Königsberg*)、および1770年に新入生に示された『学修の手引き』 (*Anweisung wie die Philosophie, Philologie und diejenigen Wissenschaften, worin die philosophische Facultät den Unterricht giebt, und in welcher Ordnung und Verbindung*) である。

『学修の手引き』は、哲学部において、どのような教育計画が存在した

のか明らかにする貴重な一次史料であるが、先行研究において、その所在は不明とされ、分析も十分になされてこなかった⁵⁾。筆者はベルリン・プロイセン文化財団枢密文書館（Geheimes Staatsarchiv Preußischer Kulturbesitz Berlin, GStAPK と略）において『講義要項』の調査を行った際に、同史料が『講義要項』のファイルに挟まって保存されていることを確認し、その分析を進めてきた。

本稿では、同史料から『講義要項』の分析からだけでは不明であった18世紀後半の哲学部の改革過程を明らかにし、近代ドイツの大学における「リベラル・アーツ」の展開とその意義を考察する。

2. 1770年におけるケーニヒスベルク大学哲学部の改革

ケーニヒスベルクは、プロイセンの首都ベルリンから東へ600キロほど離れたところにあり、現在はロシア領カリニングラードと呼ばれている。1772年に第一次ポーランド分割が行われるまで、東プロイセンと西プロイセンは陸続きになっておらず、ケーニヒスベルクは「陸の孤島」であった。そのことが幸いして30年戦争の戦禍にもほとんど巻き込まれず、同地は18世紀後半には人口5万人に達する貿易都市として着実な発展を遂げた。

カントによれば、ケーニヒスベルクは「一国の中心をなす大都市で、そこには政府の諸機関があり、一つの大学（学問の開拓のための）を持ち、それと同時に海外貿易のための立地を持ち、国の奥地から流れてくる河川を通して、さまざまな言語や風習をもつ遠方や近隣の国々との交易を促進するような都市」⁶⁾であった。大学にはロシア、ポーランド、バルト海地方などからも学生が集まり、平均して三割ほどプロイセン以外からの入学者があった⁷⁾。

2.1 18世紀プロイセンの大学

ケーニヒスベルク大学が創設されたのは1544年にさかのぼる。当時、同地方はブランデンブルク選挙侯の一族であるアルブレヒト（Albrecht von Brandenburg = Ansbach, 1490-1568）の統治下であり、彼の名から大学には「アルベルティーナ」という愛称が付けられた。

18世紀プロイセンには、ケーニヒスベルク大学の他にハレ大学(1694-)、フランクフルト・アン・デア・オーデル大学(1506-1811)、デュイスブルク大学(1655-1818)が存在した。ハレとフランクフルト・アン・デア・オ

ーデルは直接ベルリンの「上級監督局」(Oberkuratorium)の監督下に置かれており、ケーニヒスベルクとデュイスブルクは「管区局」(Provinzialbehörde)を通じて政府からの指示を受けていた⁸⁾。当時プロイセンの大学は国家の一機関であり、つねに政府による指示・管理のもとにあった。

プロイセン四大学のなかで、もっとも規模が大きかったのはハレ大学である。同大学は神学部、法学部、医学部からなり、18世紀初頭より敬虔主義神学の拠点であった。また、法学部の学生の多くが官吏に登用されており、プロイセンの近代化政策の支柱を担うエリート養成機関としての役割も果たしていた。そのためハレ大学を大学改革の範とし、そこで実施された改革が数年遅れでケーニヒスベルク大学においても行われることがあった⁹⁾。

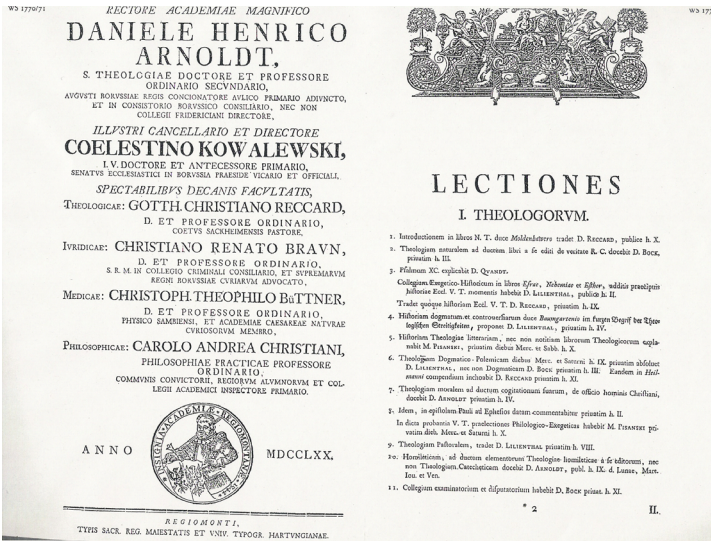
学生数について、1776年から1785年までの10年間を比較してみると、ハレ大学は平均847人、フランクフルト・アン・デア・オーデル大学は平均208人、デュイスブルク大学は平均84人、ケーニヒスベルク大学は平均329人となっている¹⁰⁾。ケーニヒスベルク大学は当時プロイセンにおいて2番目の規模を誇る大学であった。

2.2 ケーニヒスベルク大学における哲学部の役割

ケーニヒスベルク大学の哲学部には、1735年の学則に基づき、「ヘブライ語」、「数学」、「ギリシア語」、「論理学・形而上学」、「実践哲学」、「自然学」(1619年から1637年の間は医学部に属す)、「詩学」、「弁論述・歴史」の八人の正教授が置かれていた。哲学部の役割については、学則のなかで、学生が豊かな学識を獲得し、専門のための基礎知識を身につけることと規定されている¹¹⁾。

カントが哲学部の「論理学・形而上学」の正教授として着任した1770年、同大学では一つの改革が着手された。それは『講義要項』の大幅な書式改訂である。『講義要項』とはラテン語で書かれた講義案内のことであり、各学期のはじめに大学の掲示板に張り出され、地元の新聞にも情報が掲載された。学生はこれをみて受講科目を選択した。

史料1および史料2を比較するとわかるように、1770年度夏学期まで『講義要項』では、はじめに教員の名前が記され、そこに開講教科、時間、教室、教科書などが列記された。これが1770年度冬学期になると、はじめに学長、学部長の名前が記され、次いで学部ごとの区分に応じて開講教科、



※ 冒頭に学長 Diniele Henrico Arnoldt の名前、その下に各学部長の名前が記されている。また、この学期より挿絵が入れられる。右頁より神学部の開講講義の内容が記され、法学部、医学部、哲学部と続く。

つまり、1770年度冬学期における『講義要項』の書式改訂は、大学独自の判断で行われたというよりも、政府からの指示に従って行われたと考えられよう。この推論を補足するために、以下で『講義要項』に示された開講科目の内容について整理しておこう。

1770年度冬学期の哲学部の開講科目には、その内容に応じて A から F までの新たな区分が設けられている（表1）。

表1 1770年度冬学期における哲学部の開講科目

領域	開講科目
A	文献学
B	歴史
C	数学
D	哲学
E	言語
F	その他

それぞれの講義の開講形態については表2で示した。当時の講義は「公講義」と「私講義」に分かれている。公講義とは正教授によって行われた講義であり、在學生全員が出席すること可能であった。一方、私講義は正教授、員外教授および私講師によって開講され、聴講料を払ったものだけが受講することが許された。講義は週に複数開講される場合もある。開講形態については表2から分かるように六割以上が私講義として開講されていた。

私講師による私講義開講の背景として重要なのは次の二点である。第一は、近代ドイツにおいて、大学は国家の機関としての側面と学者共同体としての側面という二面性を有していたことである。国から給与が与えられる正教授は「国家の教授」とも呼ばれた。これに対し私講師は、これから大学で職を得ようとする博士号取得者のことであり、彼らは国家によって雇われているのではなく、日々の聴講料で生活をしており、完全に学者共同体の保護のもとにあった。そして彼らこそが「学問の自由」に守られて講義を行うことができる学者集団を形成していたのである¹⁴⁾。

第二に、哲学部における私講義の多さは正教授の給与の低さとも関係していた。そもそも哲学部正教授の給与は一般に低かったとされる¹⁵⁾。加えて、ケーニヒスベルク大学の給与はハレ大学と比べて三分の一ほどであった。そのため、正教授もまた私講義から聴講料をえることで生計をたてていた。また、私講義に対しては国家による教育内容の統制が及ばなかったことも、彼らにとっては魅力であった。

表2 1770年度冬学期における哲学部の開講形態

	領域	公講義	私講義	不明	計
A	文献学	6	17	1	24
B	歴史	0	7	0	7
C	数学	1	9	1	11
D	哲学	3	11	3	17
E	言語	—	—	3	3
F	その他	—	—	5	5
	計	10	44	13	67

3. 『学修の手引き』の内容

前述の『講義要項』の改訂はどのような経緯で進められたのであろうか。この課題に関わる文書として注目されるのが1770年に出された『学修の手引き』である。現在、同史料はGStAPKの第20分室139部門に保管されており、上述の『講義要項』に挟まれてファイルされている。そのため、同史料についての解説は文書館には残っていない。戦前の文書記録を確認してみると、同史料はかつて大学評議会関連史料とともにファイルされ、巻末には「1770年5月26日ベルリン、1770年7月5日ケーニヒスベルク」と記されていた¹⁶⁾。このことから『学修の手引き』は『講義要項』の書式が改訂される直前の学期中に作成されたと推定される。

3.1 哲学部の位置づけ

『学修の手引き』の序文には、哲学部で学ぶことの意味について以下のように記されている。

「哲学だけを、または哲学を主として学ぶものは、哲学を多くの有益で重要な事柄のために学ぶのである。というのも、哲学は概念や原理を習得するためのものであり、あらゆる他の学問分野において説明や根拠付けのために活用されうるからである。したがって、哲学を学ぶということは、それぞれの学問の補助学を学ぶということである。それぞれ学生は哲学部において、自分にとって、もっとも必要な科目をできるだけ早く学ぶべきである。これによって神学、法学、医学の理解も容易となるであろう。大学で哲学を学ぶものは、基本的に思考の技量を獲得するという意図を持っているのであり、このことは真の哲学の本質をなすものである。真の哲学とは偏見や思いこみにとらわれることなく、宗派について考え、物事の本質を追究することなのである。」¹⁷⁾

また、序文には哲学を学ぶことによって学生は奴隷のように学ばされるのではなく、みずからの意志であらゆる国の哲学者の中から最良の文献を読むことができると説明されている。そのため外国語を習得することの重要性も説かれている。

3.2 教授科目の設定

さらに同書では、哲学部で学ぶべき学問領域について六つの区分を設けている¹⁸⁾。

第一は哲学の本質に関わる学問とされる。これには理論と実践の区分があり、理論哲学の部は「論理学」、「形而上学」、「自然学」の三つから、実践哲学の部は「実践哲学基礎」、「自然法」、「倫理学」、「社会法」、「社会的賢慮」から構成されている。また、これらを補完する学問として「哲学百科」、「哲学史」、「鉱物学」などが示されている。

第二は数学である。数学を学ぶことはすべての学部にとって必要であるとされ、数学を学ぶ上ではギリシア語、ラテン語、フランス語、英語の文献も読みこなす力量が求められると説明されている。教授科目については「初級純粋数学」、「上級純粋数学」、「応用数学」の三つに区分され、「応用数学」として「水力学」、「反射光学」、「天文学」などが挙げられている。また、官吏として働くことを希望する学生には、とくに「治水学」を学ぶことが奨励されている。

第三は経済学である。なかでも統計の歴史について学ぶことが推奨されており、科目については「経済学基礎」、「地方経済」、「都市経済」、「政治学」、「官房学」が示されている。また、官吏を希望する学生にとどまらず、地域で主導的立場を果たす牧師や裁判官が経済学を学ぶことで国土は豊かになると説明している。

第四は芸術学である。内訳は「美学」、「修辞学」、「詩学」、「書法」、「文芸批評」、「アルケオロジー」、「ギリシア・ローマ古典」、「芸術史」、「芸術総論」が示されている。加えて、芸術によって国家は美化され、国民の行動様式も改善されると述べている。

第五は政治史である。内訳は「歴史理論」、「系譜学」、「年代研究」、「地理学」、「紋章学」、「貨幣研究」、「文学史」、「教会史」である。また、その他として「一般史」、「神聖ローマ帝国史」、「地域史」、「統計」も挙げられている。

最後は文献学である。教授科目については「古典文献学基礎」、「文法論」、「古典文芸批評」、「書法」、「辞書学」が記されている。

3.3 受講計画

当時の学生の在学期間は「おおよそ四学期から五学期」であった¹⁹⁾。『学修の手引き』の最後には、どの教科を、どの順番で、どの学期でとるべき

かについても付記されている。それをまとめたものが表3である。

4. 『講義要項』と『学修の手引き』との対応関係

『学修の手引き』では、哲学部で学ぶべき学問領域として「哲学」、「数学」、「経済学」、「芸術学」、「政治史」、「文献学」を挙げている。これに対して、1770年度冬学期に刷新された『講義要項』では「文献学」、「歴史」、「数学」、「哲学」、「言語」、「その他」の区分が設けられている。したがって、両者を比較してみると『学修の手引き』で示された「経済学」や「政治史」のカテゴリーは『講義要項』に反映されておらず、『学修の手引き』がすべての講義内容および講義計画を直接的に規定したわけではないということがわかる。

表3 哲学部『学修の手引き』に記された受講計画²⁰⁾

	言語・文献学	哲学	数学	歴史	政治経済
一学期	ラテン語 ギリシア語 中近東の言語 ドイツ語 フランス語 英語 イタリア語	哲学百科 論理学 美学	数学百科 純粋数学	歴史理論 文学史 一般史	政治経済財政 政治経済総論
二学期	芸術理論 書法	形而上学	純粋数学	ヨーロッパ史	地方史
三学期	ギリシア・ ローマ古典	自然学	応用数学	神聖ローマ帝 国史 紋章学 貨幣研究	政治学
四学期	聖書解釈学	実践哲学 自然法	応用数学	ドイツ史 プロイセン史	手工業、工場、 商業などの理論
五学期	聖書解釈学 詩学 文芸批評	倫理学 政治学	応用数学	ドイツ統計史 学識史 外交史 17・18世紀史	官房学 自然史
六学期	聖書解釈学	鉱物学	個別領域	哲学史	商業全般の理論 実践

ただし、『学修の手引き』に示された講義名に対応する形で「鉱物学」などの新たな講義が開講されている。このことはまた、プロイセン政府が大学教育に何を期待していたのかを明らかにする手がかりとして注目されよう。以下では、『学修の手引き』が出されたことの意味を、当時の国家と大学との関係に即して検討する。

4.1 『学修の手引き』の作成者

『学修の手引き』の表紙には「宮廷印刷所」とあり、以前の文書記録には「ベルリン5月26日」と付記されていた。したがって先行研究も指摘するとおり、同文書はプロイセン政府によって作成されたものと推定される²¹⁾。実際に、政府はハレ大学に対しても1768年12月11日に『学修の手引き』を出しており、こうした「手引き」は当時の大学政策の一環として作成されていたのであろう²²⁾。

では作成者は誰であろうか。当時、プロイセンでは四大学すべての統括機関として上級監督局があり、同局の最高責任者が大学行政に対して大きな権限を持っていた。1771年からその任にあたったツェードリッツ男爵（Karl Abraham Freiherr von Zedlitz, 1731-93）は数々の大学改革を行ったことで知られている。それ以前の1763年から1771年まではフルスト男爵（Carl Joseph Maximilian Freiherr von Fürst und Kupferberg, 1717-90）がその任にあっていた。フルストはプロイセンの司法改革に貢献を果たした人物としても知られており²³⁾、司法改革と同様、国家の指示のもとで大学の教育内容も規定しようとしていた。それがハレ大学やケーニヒスベルク大学に出された『学修の手引き』であった。

このような大学教育に対する政府の意向と学者共同体の自治に基づく大学の伝統との緊張関係が、1770年冬学期のケーニヒスベルク大学『講義要項』の改訂に示されたのである。

4.2 カントによる「鉱物学」の講義

上述のように『学修の手引き』の影響は哲学部が提供してきた学問体系を刷新するものではなかった。しかしながら、個々の正教授の担当科目にはいくつかの影響が及んでいる。以下では、もっとも関連資料が豊富であるカントに即して、そのことを補足しておく。

着任間もない1770年度冬学期、カントは少なくとも週12時間以上の講義を担当し、加えて、討論および試験も実施していた（表4）。なかでも注

目されるのが「鉱物学」の講義である。同講義は『学修の手引き』のなかで「哲学」の科目のひとつとして明記されており、「自然学」を学ぶための基礎教養として位置づけられていた。興味深いことにカントが「鉱物学」の講義を開講したのは後にも先にもこのときだけである。1771年よりフルスト男爵は大学行政から一線を退くのであるが、「鉱物学」の開講は『学修の手引き』に示された政府の指示をカントが文字通り引き受けたことを示しているといえよう。

表4 1770年度冬学期におけるカントの開講講義

	時間	開講日数	講義形態	合計時間
形而上学	午前 7-8 時	週 4 日	公講義	4 時間
哲学百科	午前 8-9 時	週 4 日	私講義	4 時間
鉱物学	午前 9-11 時	週 2 日	私講義	4 時間
自然法	不明	不明	私講義	不明

5. おわりに

本稿では、ケーニヒスベルク大学の『講義要項』と『学修の手引き』の分析を通じて、哲学部において「リベラル・アーツ」に関わる講義科目がどのように開講されていたのかを考察した。その成果は以下3点にまとめられる。

1. ケーニヒスベルク大学哲学部は中世から続く伝統的な大学の哲学部として「文献学」、「歴史」、「数学」、「哲学」、「言語」といったいわゆる「リベラル・アーツ」の教育を行っており、同時にそれは牧師、法律家、医師になるための準備過程の役割も果たしていた。哲学部の教育課程は1770年に政府から出された『学修の手引き』を受けて整備されたが、開講科目についての指示がすべて遵守されたわけではなかった。
2. 当時、大学行政の最高責任者の任にあったフルスト男爵は『学修の手引き』のなかで哲学部において政治、経済および芸術といった学問を修めることを奨励した。その理由としてそれらの学問が国家の発展に有益な学問であるということが記されていた。
3. 『講義要項』に示された開講科目から判断できることは、哲学部は『学修の手引き』によって政府から直接的な指導を受けつつも、

それまでの教育慣行を引き継いでいるということである。近代ドイツの大学は国家機関としての側面と学者共同体としての側面という二面性を有していたが、1770年の『講義要項』の書式改訂は改革をめぐる官僚機構と大学（自治）との緊張関係を内包していたとみることができる。

本稿では哲学部の分析を中心としたため、神学部、法学部、医学部の『学修の手引き』の改革については言及することができなかった。また、『学修の手引き』の影響が、その後どの程度に哲学部に残っていたのかについても検証すべきであろう。このことについてはフェルストが退任した1771年以降の『講義要項』の内容を検討することによって明らかになると思われる。これらの残された課題の解明については他日を期したい。

注

- 1) 別府昭郎、1998、『ドイツにおける大学教授の誕生』創文社、254。
- 2) Verger, Jacques, 1973, *Les universités au moyen âge*, Paris, P. 57-60
ジャックヴェルジェ、(大高順雄訳)、1979、『中世の大学』みすず書房、58-63。
- 3) このことについては、拙稿、2007年、「18世紀ドイツの大学における教育学講義の開設－ケーニヒスベルク大学に注目して－」『大学史研究』大学史研究会編(22): 2-23を参照のこと。
- 4) Kohnen, Joseph (hrsg.), 1998, *Beiträge zu einem besonderen Kapitel der deutschen Geistesgeschichte des 18. Jahrhunderts*, Frankfurt am Main, Brandt, Reinhard, Stark, Werner (hrsg.), 1994, *Autographen, Dokumente und Berichte: zu Edition, Amtsgeschäften und Werk Immanuel Kants*, Hamburg.
- 5) Paulsen, Friedrich, 1921, *Geschichte des gelehrten Unterrichts*, Bd. 2, Berlin und Leipzig, S.9, Oberhausen, Michael, Pozzo, Riccardo(hrsg.), 1996, *Vorlesungsverzeichnisse der Universität Königsberg 1720-1804*, Teilband. 2, Stuttgart-Bad Cannstatt, S.28-35.
- 6) Kant, Immanuel, 1917, “Anthropologie in pragmatischer Hinsicht”, *Kant's gesammelte Schriften*, Bd.7, Berlin, S. 120-1.
- 7) Ischeryt, Heinz, 1995, “Material zur Charakteristik des kulturellen Einzugsgebiets von Königsberg i. Pr. in der zweiten hälfte des 18. Jahrhunderts”, *Königsberg und Riga*, Tübingen, S.32.
- 8) Conrad Bornhak, 1900, *Geschichte der preussischen Universitätsverwaltung bis 1810*, Berlin, S. 180. oberhausen, Michael, Pozzo, Riccardo, a.a.O., S.24.

- 9) 18世紀後半においてケーニヒスベルク大学では教職者養成ゼミナールの創設準備が進められたが、政府からはハレ大学をモデルとするように指示が出されている。拙稿、前掲論文を参照のこと。
- 10) Hans-Werner Prahl, 1978, *Sozialgeschichte des Hochschulwesens*, Kosel, S. 261.
- 11) Arnoldt, Daniel Henrich, 1746, *Ausführliche und mit Urkunden versehene Historie der Königsbergischen Universität*, Bd. A, S. 314-93.
- 12) Oberhausen, Michael, Pozzo, Riccardo, a.a.O., S. 304-5.
- 13) Ebenda, S.306-7.
- 14) J. Jastrow, 1896, *Die Stellung der Privatdozenten*, Berlin, S. 1-6.
- 15) Ludwig von Bazcko, 1804, *Versuch einer Geschichte und Beschreibung der Stadt Königsberg*, Königsberg, S. 333.
- 16) Emil Arnoldt, 1909, *Gesammelte Schriften*, Bd. 5, Berlin, S. 224.
- 17) GStAPK, HAXX, EM139b, Bd. 5, S. 121.
- 18) Ebenda, S. 121-8.
- 19) Ischreyt, Heinz, a.a.O., S. 33.
- 20) GStAPK, HAXX, EM139b, Bd. 5, S.128-30 より作成。
- 21) 別府昭郎、2001年「啓蒙期におけるケーニヒスベルク大学－教授・学問領域・国家との関係－」『大学史研究』17: 127。および Oberhausen, Michael, Pozzo, Riccardo, a.a.O., S.24.
- 22) Emil Arnold, a.a.O., S.225.
- 23) Akademie der Wissenschaften (hrsg.), 1878, *Allgemeine Deutsche Biographie*, Bd. 8, Leipzig, S. 213-4.

参考文献

- Arnoldt, Daniel Heinrich, 1746, *Ausführliche und mit Urkunden versehene Historie der Königsbergischen Universität*, Bd. A-D, Königsberg.
- Bazcko, Ludwig von, 1804, *Versuch einer Geschichte und Beschreibung der Stadt Königsberg*, Königsberg.
- Gause, Fritz, 1972, *Die Geschichte der Stadt Königsberg in Preussen*, Bd 3, Köln.
- Goldbek, Johann Friedrich, 1782, *Nachrichten von der Königlichen Universität zu Königsberg in Preußen*, o. O..
- Metzger, Johann Daniel, 1804, *Ueber die Universitaet zu Koenigsberg. Ein Nachtrag zu Arnoldt und Goldbeck*, Königsberg.

近代ドイツの大学における『学修の手引き』

Selle, Götz von, 1944, *Geschichte der Albertus Universität zu Königsberg in Preußen*, Würzburg.